

日本オーステイン協会第 18 回大会プログラム

- 日 時： 2025（令和 7）年 6 月 28 日（土） 受付：12：15 より
 - 場 所： 立正大学品川キャンパス 13 号館 1353 教室
（〒141-8602 東京都品川区大崎 4 丁目 2-16）
※ JR 山手線 大崎駅、JR 五反田駅から徒歩 5 分、東急池上線 大崎広小路駅から徒歩 1 分
※ 大学ホームページ（<https://www.ris.ac.jp/access/index.html>）ご参照のこと。
 - 参加費： 日本オーステイン協会会員：無料
当日会員（上記会員以外）：一般 1,000 円、学生 500 円（当日受付で支払い）
-

◆ 開会の辞 （13：00～13：05）

鈴木 美津子（日本オーステイン協会会長・東北大学名誉教授）

◆ 総会 （13：05～13：25）

◆ 基調講演（13：30～14：30）

司 会： 向井 秀忠（フェリス女学院大学教授）

講演者： 塩谷 清人（学習院大学名誉教授）

「オーステイン小説に見られるリチャードソンの影響」

◆ シンポジウム（14：45～17：15）

「詩人、小説家、批評家スコットとオーステイン作品」

司会・講師： 松井 優子（青山学院大学教授）

講 師： 坂田 薫子（日本女子大学教授）

講 師： 吉野 由起（東京女子大学准教授）

◆ 閉会の辞 （17：20～17：25）

◆ 懇親会（18:00～20:00）

やさい家めい（五反田東急スクエア内 <https://yasaiya-mei.com/1660/>）

問合せ先： 日本オーステイン協会事務局
〒790-8578 松山市文京町 4-2 松山大学新井研究室内
E-mail: harai@g.matsuyama-u.ac.jp

日本オースティン協会第 18 回大会発表レジュメ

【基調講演】

オースティン小説に見られるリチャードソンの影響

塩谷 清人（学習院大学名誉教授）

オースティンは多数の先行する作家の中でもリチャードソンが大好きだった。しかしどのような点が好きでそれがどう反映されているか、その影響関係を明示することはそう簡単ではないように思う。そこで、一つの試みとして、今回はリチャードソンの小説の特徴——それがイギリス小説のひとつの源流を作った——を提示しながらオースティン小説との関連を示してみたい。

【シンポジウム】

詩人、小説家、批評家スコットとオースティン作品

司会・講師： 松井 優子（青山学院大学教授）

講 師： 坂田 薫子（日本女子大学教授）

講 師： 吉野 由起（東京女子大学准教授）

2025 年、ジェイン・オースティン（1775-1817）は生誕 250 周年を迎える。そのオースティン作品を最初期に評価した批評家の一人がウォルター・スコット（1771-1832）である。スコットは晩年、その『日誌』において、自身の作風と比べつつ、日常生活における人間関係を描き出すオースティンの繊細な筆致を讃えた。一方、オースティンも『分別と多感』（1811）や『説得』（1818）において当代の人気詩人の一人としてスコットやその長篇物語詩に言及し、『マンスフィールド・パーク』（1814）では『最後の吟遊詩人の歌』（1805）の詩行をもじっているほか、姪アンナへの書簡（1814 年 9 月 28 日付）では、スコットの小説第一作『ウェイヴァリー』の抗しがたい魅力にふれている。かたわら、この二人の作家はその評価が 19 世紀と 20 世紀半ば以降とで大きく変化、あるいは逆転したという点で興味深い対照をみせてもいる。

そこで本シンポジウムでは、まずは一足先に 2021 年に生誕 250 周年を迎えたスコットについて、1871 年の生誕 100 周年記念行事、1932 年の没後 100 周年記念行事を振り返りつつ、この間のスコット、ひいては文学受容をめぐる状況とその変容について概観したい。その後、スコットの作家としてのキャリアの初期に位置し一躍彼の文名を上げるようになった長篇物語詩や、新たなジャンルを確立したとされる小説作品の特徴について、バラッド編纂者や批評家としての活動も視野に入れながら検討し、そのうえで、あらためてオースティン作品の語りについて考察を試みる。これらを通して、オースティン生誕 250 周年を記念しつつ、同時代を代表する詩人、小説家、批評家スコットの再評価に向けた一歩ともなることを目指したい。

スコットが「歴史ロマンス」と呼ぶ歴史小説の執筆を手掛ける前に、ボーダーズ地方のバラッド蒐集(『スコットランド国境地方歌謡集』全3巻(1802-03)として刊行)や詩作(『最後の吟遊詩人の歌』、『マーミオン』(1808)等の長篇物語詩や、無数の短詩)に傾倒したことは広く知られている。これらはスコットの年譜上、きわめて初期の作品群として位置づけられるが、のちのウェイヴァリー・ノヴェルズの創作上の関心事や手法の萌芽と思われる特徴が随所に見られ、歴史性と擬古性、呼び覚ます過去との距離感と連続性の描出、斬新な実験性、同時代のウィリアム・ワーズワス(1770-1850)ら詩人たちとの交流やピクチャレスク美学との応答の痕跡も認められる。本報告では『最後の吟遊詩人の歌』ほか数篇の作品を、構成の手法、擬古的・超自然的なモチーフ群の造型法と用法、自然の描写と用法の三点から検証したい。

批評家スコットと歴史小説の作法

松井 優子

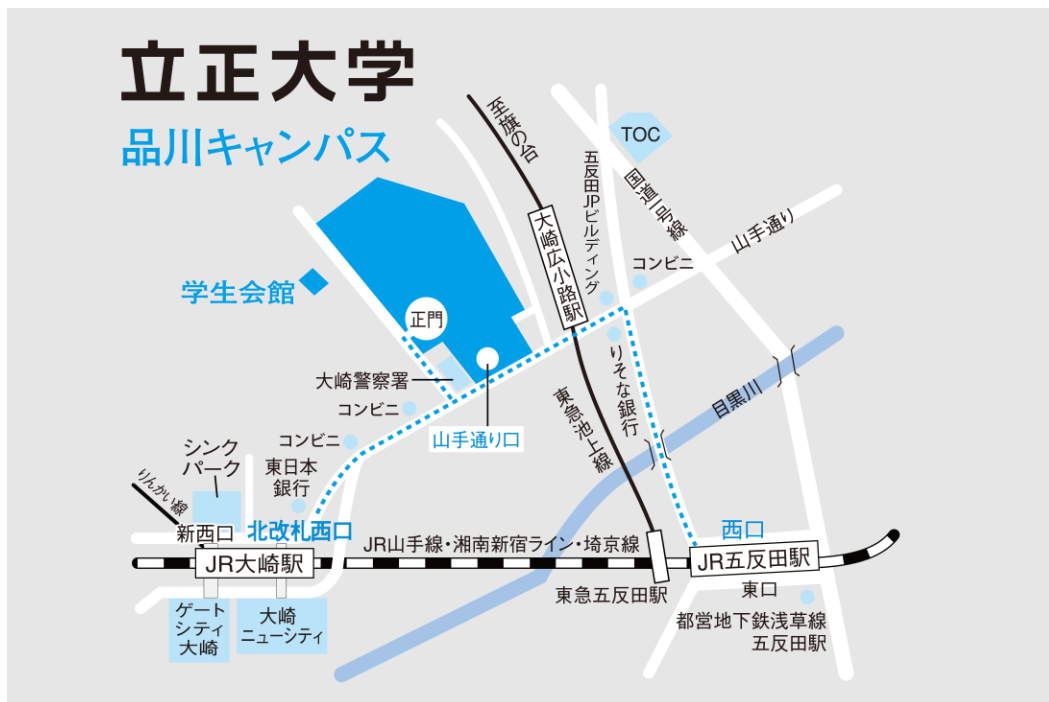
本報告ではオースティン批評、および歴史小説の技法という二つの点から、批評家、小説家スコットの再評価を試みたい。まず、19世紀末から20世紀初頭にかけての英文学教育や入門用の文献を参照し、この時期のオースティン評価促進の動きにおいて、オースティン研究者であればおそらくは誰もが知っているであろうスコットの評言が果たした重要な役割について確認する。続いて、この評言でのスコットの自己評価をもとに、代表作『ウェイヴァリー』(1814)や『アイヴァンホウ』(1819)等から風景や人物にかかわる描写を取り上げ、その特徴について具体的にみていながら、それらと歴史小説というジャンルとの関係について検討したい。その過程で、従来あまり注目されてこなかった19世紀文学批評における批評家スコットの位置づけや、スコットの小説作品の多層的な構造や多面的な視点、オースティンとはまた異なるかたちでの「写實的」な小説技法の見直しにつながればと考えている。

オースティン小説の語りの戦略

坂田 薫子

本報告では、スコットが「ありふれた生活を送る人びとの関係、心理、人物描写に長けている」と称賛したオースティンの作風は、オースティンの語りの形に拠るところが大きいのではないかという視点から、オースティン作品を分析する。一人称の語り手がほぼすべてを解説するスコット小説と、基本、三人称の語り手がヒロインを焦点化人物(フォーカライザー)に据えて物語が進行するオースティン小説の語りの差に触れたあとで、登場人物を語り手の焦点化人物として語る語りの特徴——真の姿が分からない登場人物が存在すること——を指摘する。例として『マンズフィールド・パーク』を取り上げ、焦点化人物ファニー・プライスの嫉妬に満ちた視点と、物語の終盤で自己正当化を行うエドモンド・バートラムの語りによってメアリ・クロフォードが歪められている可能性について論じる予定である。

【交通アクセス】 (<https://www.ris.ac.jp/access/index.html>)



【キャンパスマップ】 (<https://www.ris.ac.jp/access/shinagawa/floormap.html>)



【懇親会場】

やさい家めい 五反田東急スクエア (<https://yasaiya-mei.com/1660/>)

会 費： 5,200 円